

# e-dream-s通信

e-dream-s ホームページ <http://www.e-dream-s.org>

No.35 発行：2003年6月8日特定非営利活動法人 イー・ドリームズ

- 目次
- 1 で、あなたは何かやりたいの? 辻荘一
  - 2 最近の Web 読書から 井川好二
  - 3 “事業とお金” - 新事業年度へ - 中川房代
  - 4 カメルーン・ピグミーとの出会い(その2) 山田昌子
  - 5 「韓日パートナーシップ時代」の夜明け 塚本美紀
  - 6 「ぜひ参加してください!」 山本貴子
  - 7 第12回理事会の報告



カメルーンツアー・チャータースクールツアー報告会の様子（5月24日）

## で、あなたは何がやりたいの？

辻 莊 一

みなさん仕事は楽しいですか？楽しいこともあります、なかなか思うよう行かず辛いこともありますね。生活の糧も仕事から得ている以上、いっそ辞めたらという考えが心をよぎったりすることがあっても、なかなかそうも行かない事情があります。ひどい場合は低賃金長時間労働の職場で、虐められて辛い毎日を送っていても辞められず、その職場にしがみつかざるを得ないこともあります。仕事とはそう言うものです。趣味じゃないんですから、ある程度は仕方がないですね。

さて、先月24日から25日にかけてイー・ドリームズの理事会が行われました。議題は2002年度の事業報告・評価と2003年度へ向けての事業方針です。2000年7月に認証されて以来様々な活動に取り組んできたイー・ドリームズではあるが、成果も数多くある一方課題も少なくありません。他の多くのNPOと同様目に見える差しせまった課題は財政で、せつかくの意義ある活動を今後も続け充実させていくには、財政は避けて通れない問題です。もちろん活動内容のさらなる充実も求められています。

しかしここで書きたいのはそのことではありません。書きたいのはNPOイー・ドリームズへの会員の関わりについてです。NPOの事業は会員の個人的な趣味ではなく公的な活動です。そこには社会的な意義が必要ですしその活動は開かれた公正なものでなければなりません。また、NPOは職場でもありません。会員はそこから生活の糧を得るためではなく、その使命に共鳴して活動に参加しているのです。

では、会員が皆その使命や活動内容をよく理解・共鳴し、非営利活動法人という社会的立場も分かってまじめに活動すればそれで必要十分か、ということそうではないと思うのです。以上のことは広い意味で形の部分で、一番大切な魂の部分はメンバーがイー・ドリームズの活動が本当に自分のやりたいことだと認識して活動しているかどうか、という事です。もちろん活動に直接関わることのできない事情がある場合は、資金面だけの参加ということもできますが、イー・ドリームズのような規模の小さな団体の場合は少なくともコアのメンバーが、定款にある使命や社会的意義といった「言葉」に共鳴するだけでなく、もっと深いところか

ら湧き出る動機を持って初めて、社会への影響力を持ち、本当の意味で「成功」するのだろうと思うのです。

NPO は辛くても嫌々でも続けなければならない「仕事」でもありませんし、なんとなく楽しいだけでよい趣味の活動の場でもありません。仕事と言う「枠」はなく、趣味ではない「社会性」をもつ NPO はメンバー次第で非常に大きな可能性を秘めています。だからこそ、この活動は本当に自分のやりたいことなのか、ということに常に問われ続けています。そして、もしそうでなければそれを変えることができる場でもあるのです。

e-dream-s.come.true

## 最近の Web 読書から

井川好二

マルチメディア、インターネットの時代になったから、紙でできた本を読まなくなったかと云うと、そんなことは全くない。むしろ、インターネットショッピングで、欲しい本が簡単に買えるようになって、自宅のコンピュータから気軽に注文できるため、本のページを繰る楽しみが増えていると同時に、その宅急便で次々に送られてくる本の置き場所に、家内に小言を云われる今日この頃である。

一方、コンピュータの画面での読書も、最近増えている。こちらの方は、HP の書き込みや新聞記事、メールマガジンや論文などで、活字数もページ数も少なく、短時間で読めて、気に入れば、ハードディスクにダウンロードして、場所も取らない。そういう読書も楽しむ時代になった。

最近のインターネット読書で気に入ったものを、以下に紹介する。今回は英語のものに限定したが、日本語ものは、いずれと云うことにしたい。読者の一興となれば幸いである。

( 1 ) New York Times ("NYTimes.com" [nytdirect@nytimes.com](mailto:nytdirect@nytimes.com))

New York Times のメルマガ版である。毎日の NYT の記事の見出しを送ってくれる。そのメールの画面から、興味ある記事をクリックすれば、インターネットが立ち上がり、NYT の HP でその記事が読めるようになっている。この HP の記事の偉いところは、プリントアウト用に広告などの掲載されていないバージョンも選ぶことができる点と、その記事を知り合いにメールで送信できる機能も付いている点である。

今春のイラク戦争の折など、毎日の戦況を NYT の紙面で確認できるのは、日本国内のメディアと、報道姿勢を比較する上で、非常に参考になった。もちろん、教材にも使える。

この HP の利点をさらに云えば、News Tracker と云うサービスが付いていることで、このサービスを利用すると、自分が興味のある事柄に関係したニュースが報道される度に、メールにこう云うニュースがありましたよ、レポートしてくれる。もちろん、そのメールの記事のタイトルをクリックすると、インターネットが立ち上がって、NYT の HP のその記事が読めるようになっている。

例えば、"charter school" は、私の News Tracker の項目の一つで、関連の記事が出る度に知らせてくれる。まことに重宝している。しかし、無料であったこのサービスが、有料になるとの発表があってややショックを受けた。とは云え、料金は、年間\$19.95。年間 2,000 円ちょっとでこのサービスを続けて受けることができるならと、早速手続きをとった。世界の動き、アメリカの動き、今年も眼が離せない。

ちなみに、NYT のホームページは：

<http://www.nytimes.com/pages/today/headlines/>

( 2 ) 中谷彰宏の HP の英語版 <http://www.an-web.com/english/index.html>

本誌でも紹介したことのある、中谷彰宏の HP 中にある英語版のページである。中谷の日本語で書いたものは、HP で読むと云うより、電車の中で時々読むことにしているが、ここに紹介されている英語バージョンは、HP で読む。

例えば、次のような文が載っていて、ほとんど直訳で笑ってしまうが、微笑ましく、ちょっと気分良くなる。何となく、鬱なときに良い。

1. We meet chances for success three times a day.

There is not a person on earth who does not have chances for success. The crux of the matter is that some people recognize these chances and others do not. The man who cannot recognize his chances believes that these chances but rarely appear, and so has thrown in the towel from the start. If he were only to wake up the fact that he meets chances for success three times a day, he would develop a consciousness that says, "Hey, isn't this a chance here?"

むろん、日本語ページも同様に、ちょっと元気になりたい時に読むのが良い。こちらの方は、ほぼ毎日更新されていて、日記風なのが面白い。

( 3 ) JAPAN ECHO <http://www.japanecho.co.jp/>

英語で現代日本を紹介するサイトである。同名の月刊英語雑誌の拡売を意図していることは当然だが、このHPにも、結構いろいろな論文が全文掲載されていて、利用価値は高い。

以下に紹介するのは、韓国で暮らしたり、アメリカで暮らしたりする経験を持つ東京都立大学の教授、Chung Dae-kyun が今年4月に書いた在日韓国・朝鮮人に関する論文である。この夏、韓国へいく事情もあり、興味深く読んだ。

趣旨としては、現在、在日韓国人が、日本における外国人である立場を守る意味はあるのか？ 帰化した方が、彼等にとっても、日本にとっても良いのではと云う。この辺りは、一個人として、一教育系団体として、もう少し深く考える機会があった方が良いと思われる。

The gap between nationality and identity gives their existence a certain ambiguity, and they are hard-pressed to explain why they retain their Korean citizenship. The solution is to change their nationality to match their identity by becoming Japanese citizens and full members of Japanese

society instead of remaining suspended in the unsettled status of "permanent foreigner." If they wish, there is nothing to prevent them from living as ethnic Korean Japanese.

Chung, D. (2003). Japan's Korean Community in Transition. *Japan Echo*, 30(2), April 2003.

## “事業とお金” —新事業年度へ—

中川房代

先々週の週末、第12回理事会を開催した。議題の主な案件は、前事業年度の事業総括・収支決算と6月からの今年度方針の決定であった。事業総括については、10以上のプロジェクトの報告があり(理事会報告を参照)振り返ってみると、この1年間に実に多くの活動をしてきたのだと改めて感じる。

今年度方針の中心となった論議は、1つには、「@aglance 事業は e-dream-s のコア(核となる)事業足りうるか」であり、もう1つは、「どう収支のバランスをとっていくのか」であった。言い換えると、e-dream-s は何をやる団体なのか、何で収入を得るのか、ということである。今まで単年度でツアーなどには取り組んできたが、継続して事業として展開して来たのは、@aglance 事業である。サイトも、内容的には充実してきており、コンテストで賞を頂いたり、雑誌で紹介してもらったり、と社会的にも評価されてきている。しかしながら、年間でかなりの費用が掛かっており、その分 e-dream-s の財政を厳しいものにしてきているのも事実である。

それだけ費用を掛けても継続していくべき事業なのか? e-dream-s の代表的な事業としていくのかどうか? 理事会ではその点について論議をした。様々な意見が出たが、1年後に結論を出すこと、今年度1年間は内容の充実と費用の削減・収入の確保をめざして継続すること、の2つを決定とした。事業責任者である辻代表理事のもと、早急にその方針をまとめることになっている。(進捗状況については随時お知らせしていきます。)

---どう収支のバランスをとっていくのか？ 資金調達・収入の道は？

日本の多くの NPO にとっても、ネックになっている課題ではある。正念場のこの 1 年で方針が出せるようにしていきたい。

話は変わるが、昨年度入学した NPO 大学院講座の 2 年目 (M2 コース) が、5 月中旬から始まり、また毎週土曜日難波に通っている。この学校は、株式会社の経営で、構造改革特区の株式会社による学校運営の参入を睨んで開設しており、特区が認められたらすぐに申請をする運びになっている、と聞く。文部科学省認可の正式な大学院ではないが、M2 では卒業にあたって「修士論文」が課せられている。「研究論文」か「ビジネスプラン」か「自己の運営する NPO の分析の論文」が想定され、来年 1 月末に完成の予定で進めなさい、と言われている。

さあ、何を書く？ 私に何が書けるのか？

いろいろ考えてみた。

現在思案中なのは、NPO の資金調達についての論文。ケーススタディとして、今年 3 月に訪問したアメリカのチャータースクールを取りあげようと考えている。訪問した 1 つのチャータースクールでは、資金調達を行う組織を学校とは独立して立ち上げ、年間 85,000 ドルの資金を得、また 45,000 ドルの寄付があるという。学校も 1 種の NPO であり、アメリカの教育事情の中でのチャータースクールの存在意義や寄付文化の根付いているアメリカでの NPO の資金調達の考え方や方法を学ぶことは、私自身の勉強になるばかりでなく、e-dream-s を始め日本の NPO の今後の経営にも役立っていくのではないかと思う。幸い、ツアーの事前・事後学習で準備した資料もあり、訪問したチャータースクールの担当者ともコンタクトがとれる状況にある。

論文なんて書けるん....?? と不安も大きいですが、2 年間 NPO の専門講座で勉強をした者として、何とか、少しでも役立つ人材になれるように、頑張りたいと思っている。

## カメルーン・ピグミーとの出会い（その2）

山田昌子

私はお祭りが大好きだ。私は京都に生まれ育った。「葵祭」の行われる5月15日、小学校は午後から休校になる。祖母と連れ立って、山紫水明が感じられる鴨川のほとりで、葵祭の行列を見るのが慣例になっていた。小さな子供にとっては、伝統的な和服に身を包んだ人たちの行列を見るよりも、お祭りに集まった人達の熱気が楽しかった。帰宅すると決まって鯖寿司をほおばった。美味しいものは祭りには欠かせない。今では初夏のなつかしい思い出となっている。

京都市郊外に住むようになると、7月に行われる近所の小さなお寺のお祭りが楽しかった。その日ばかりは、民家の間に走っている狭い道路が約200メートルほど車両通行止めになり、両側に露店が立ち並ぶ。お面を売る店、輪投げや金魚、風船釣りの店などにぎやかだ。綿菓子を見ると思わず口にしたくなるし、また鮎焼きやお好み焼きの臭いがたまらない。祭り太鼓の音や笛が一層お祭り気分を盛り上げてくれる。ちょっと1杯ひっかけてほろ酔い気分で歩いている大人たちは、その特別な日を一層楽しんでいるように見えた。

カメルーンはビピンディのエサマ氏（註1）宅によく着いた大晦日、近所から音楽が聞こえて来た。お隣にもう1件エサマ氏の弟さんの家があり、その前の空き地にたくさんの人が集まって踊っているようだった。中川さんと私は、なんだかうきうきしてきた。「踊り、見てきていいですか？」お祭り好きの血が騒いだ。折角来たんだから、見るだけではなく一緒に踊りを楽しまなくっちゃ！何度もビピンディのピグミーを訪れているマナさん（註2）は、もうすでに踊りの輪に加わっているらしく、姿がなかった。

時刻は深夜近くになっており、外には電燈はなく、真っ暗だった。（時差を意識しなければ）日本では紅白歌合戦を見ている時間かな？暗闇の中、隣りの家の明かりを頼りに3、40名の人々が集まって、輪ができていた。輪の中では数人の女性が打楽器のリズムに合わせて踊っていた。「わあ、やっぱり踊ってる！これがピグミーの大晦日のお祝いの踊りなん？！楽しそう！！」

男性4、5人が、切り倒した木の幹の中をくり抜き片方に皮をはった楽器や、木の幹を横に



して中央をくり抜いた楽器を棒で叩いていた。打楽器中心で、人間の音楽好きの本能を刺激するような独特のリズム。輪の中で踊っているのは女性たち。T-シャツにスカートや長ズボンの女性もいれば、アフリカン・スタイルの布のワンピースの女性もいた。頭に色とりどりの布を巻いている女性もいれば、自慢の髪を編みこんでいる女性もいた。特にお正月用の正装をしているというわけではなかったが、踊りのリズムが速くなるにつれ、大晦日の華やいだムードが増しているのがわかった。輪のまわりで男たちや子供たちも踊りを見ていた。遅い時間だというのに、小さな子供たちもいた。大晦日だけは特別なのかな？！

輪の外で立って見ていると「向こうに行こう」と促された。踊りが見やすいように洋風建築の家のポーチに椅子が並べてあり、私たちはそこに案内された。なんだか王様が踊りを見物するような場所に思われた。気遅れして躊躇していると、エサマ氏が言った。「あなたたちはお客さまですから、お座りください。」エサマ氏の弟夫婦の隣りに座った。しばらくすると、中年の男たちが白い液体を持ってポーチを上がって来た。ガラスやプラスチックのコップを差し出された。お酒をふるまってくれるようだ。何だろうと見ていると、私たちのホームステイのホスト、P氏は「パームワイン」だと説明してくれた。近くの椰子の木を切り倒し樹液を取り作るそうだ。少しずつボトルに入る中で、樹液は発酵し美味しいアルコールになると言う。地元の酒を口にしない手はない。パームワインをいただくことにした。カルピスを薄くしたような味だが、少しアルコールが入っており、飲みやすい。喉が乾いていた私は、お代わりまでしてしまった。いつの間にかマナさんもポーチに座りパームワインを飲んでいった。白いパームワインは、暗い夜の祭りを一層酔わせてくれるような気がした。

賑やかな音楽の合間に、P氏は「ピグミーというよりはこの近所の人達の踊りのようですね。」と私の耳もとで説明してくれた。が、マナさんによると「これはピグミーの踊り」だそうだ。どちらが正しいのかよくわからない。ピグミーも、昔ながらの狩猟採集をしながら移住生活を送っている者は少なくなり、レンガやセメントで1戸建ての家を建て、定住生活をする者が増えているので、後者の人々が集まって楽しんでいるのかもしれない。

「さあ、私たちも輪に加わりましょう。」マナさんが誘ってくれた。いつの間にか、輪の人たちが増え、5、60名ほどになっていた。中央で年輩の女性が口に小さな笛をくわえ、リズムに合わせて吹いていた。リーダーのようだった。輪の中に人がいなくなると、彼女に、中川さんと私、P氏、マナさんが2人ずつ順に引っ張り出され、ダンスに自信がありそうな女性とそれぞれペアになって向き合って踊ることになった。みんなの視線が集まり、緊張する。どうしていいかわからない私たちは、兎に角リズムに合わせてパートナーの真似をした。タン

タンタタタ、単純なリズムだが、どのような動きが良いダンスなのかわからない。足や手を必死で動かした。右左、右左。前後ろ、前後ろ。腰もふった。なんとなく2人の呼吸があっ  
てきたと感じた時、言葉はわからないが、周りで見ているみんなが声援を送ってくれている  
のがわかった。外国から来た私たちも、大晦日のダンスを盛り上げる一因となっていると何  
となく感じた。

「やった！」P氏がカメラを向けてくれた。慣れてくると、もっと上手く踊りたいと思うの  
は欲張りか?! どうしたらいいの? パートナーの動きを見ると、おしりを突き出して踊って  
いる。この方がよりセクシーなのかな?! リズムは段々速くなった。パートナーと合わせる  
動きも速くなり、熱がこもる。エキサイティングだ。大きな拍手で、数分の私たちの踊りが  
終わった。パートナーの女性が「よくやったね! なかなか良かったよ! 」と言わんばかりに  
私を抱き締めた。イエーイ!! 「あなたのリードが良かったからよ。」言葉は通じないが私は  
心の中で叫び、笑顔をかえした。この瞬間、ピグミーも日本人もなかった。

大晦日のピグミー族との夜は、こうしてふけていった。私たちは午前3時頃に寝たが、祭り  
の音楽は元旦の7時まで続いていた。

---

註1：もとピグミー族のメイヤー。医者。現在も、ピグミー族の教育など様々な事柄に援助をしている。  
Fondation Camerounaise pour la Promotion des pygmees 会長。

e-dream-s 通信5月号「カメルーン・ピグミーとの出会い(その1)」参照。

註2：ヤウンデにある Government High School Biyem-Assi の理科の先生。日本の JICA で働いたことが  
ある、自称親日派。e-dream-s 通信5月号「カメルーン・ピグミーとの出会い(その1)」参照。





## 「韓日パートナーシップ時代」の夜明け

塚 本 美 紀

夕食のテーブルにつき、何気なくテレビに目をやると、天皇陛下が宮中でスピーチをしている。韓国のノ・ムヒョン大統領を迎えての宮中晩餐会の様子が中継されているのだ。

古くから両国の人々がたどってきた歴史を、常に真実を求めて理解しようと努め、その上に立って、両国国民の絆をゆるぎないものにしていかなければならないと思います。

天皇陛下は、そう仰ってシャンパンの入ったグラスを上げて、乾杯した。

日本と韓国のことを思う時、隣の国同士でありながら、というより隣の国であるが故に、わかっているようでわかっていないことが多いように思う。昨年11月、ECAP 2003 Korea の下見でソウルを訪問した際、江南高校で日本についてのミニレクチャーを行う機会に恵まれた。「ソニーは本当に日本で人気があるのですか。」などといった無邪気な質問に混じって、「日本の学校では、日韓の歴史について教えないと聞きましたが、本当ですか。」「竹島のことについて、あなたはどう思いますか。」といった質問が高校生の口から次々となされ、私はしどろもどろになってしまった。彼らが見ているものと、私が見ているもの間に大きなギャップがあるように感じた。

ECAP 2003 Korea の韓国側の協力者の中心人物である江南高校のクォン・ヤンヒ先生は、反日的な歴史教育を受けてきた世代である。彼女にとって、ずっと日本は「悪い国」だったそう。そんなイメージが変わるきっかけとなったのが、英国・リーズ大学留学中の日本人との出会いだという。そこで出会った日本人は親切で付き合いやすい人達だったと言う。彼女の中で、学校で習った悪い国である日本と、自分が実際にあった親切な日本人たちとの間に大きなギャップが生まれてきたそう。

ヤンヒの息子は、小学校に入学してしばらくして、「お母さん、僕、日本は嫌いだよ。」と言ったそう。聞くと、学校の先生に、昔、日本が韓国にひどいことをしたと教えられたという。隣国である日本がひどいだけの国ではないことを息子に知ってもらいたいと思ったヤンヒは、今年のお正月、ご主人と二人の息子と一緒に来日した。滞日中、私の家や広島県の山本

貴子さんの家に滞在し、日本の生活にも触れた二人の子供たちは、日本を離れる時、「お母さん、日本のお家はいいねえ。日本の御飯はおいしいねえ。」としきりに言い、すっかり日本鼻眞になったそうだ。

ヤンヒのお母さんは、日本支配下に学生時代を送った。今でも、日本人の先生たちとの学生時代を懐かしく思っているそうだ。ヤンヒにとっては、憎むべき日本の支配を受けながら、日本人の先生たちを懐かしむ母親は理解しがたく、とてもアイロニカルだと言う。

ともすると歴史の解釈や教育は、政治に利用され、私たちは眞実を見失いがちだ。しかし、実際に体験することのインパクトは大きい。天皇陛下の「おことば」にあるように、「常に眞実を求めて理解しようと努める」のなら、実際に体験することが大切だと思う。

そして、そのためには、「上」からの活動だけではなく、「草の根」の活動が不可欠だと思う。「教育・コミュニケーション・ネットワーク」を掲げるNPO法人である e-dream-s がこの「草の根」の活動の一端を担うことができればと思う。

幸い、日本と韓国は間に海があるものの、飛行機で1, 2時間という近さだ。教育に携わるものが、もっとこの海を渡り、行き来することになれば、私たちはもっとわかりあえるのではないかと思う。金曜日、ちょっと飛行機に乗って韓国に行き、そこで日本についてのレッスンをさせてもらう。その後、韓国の先生のお宅にホームステイし、OBビールを飲みながらお互いのことを語り合う。そんな経験がもっと日常的に、もっと多くの先生に起こるようになれば、ノ・ムヒョン大統領の言う「韓日パートナーシップの時代」を開いていくことができるのではないか。ECAP 2003 Korea は、そんな新しい時代の第一歩を築くことができるのではないかと思う。私たちが、実際に韓国に行き、韓国の先生方と生活をともにし、話し合い、そして教材を作る。そんな私たちの体験を通して作られた教材は、きっと教室で日韓の子供たちが、お互いのことを理解する助けとなると確信している。

「ぜひ、参加してください！」

山 本 貴 子

ECAP (Educators' Collaboration of Asia-Pacific)2003 Korea (日韓相互理解教材開発プロジェクト) は、今夏8月6日(水)から12日(火)に実施される予定です。5

月31日現在、参加申し込みは、17名です。今回の企画は、今後のe-dream-sの新たな活動を展開していくターニングポイントであり、ぜひ、会員全員で参加、体験していただきたいと思っています。

大阪の冬合宿に参加し、講演して下さった Young Hee が、家族と一緒に我が家にホームステイした時、たった1泊2日という短い時間でしたが、顔を合わせて話をすることの大切さを実感しました。日本語、韓国語、英語の3ヶ国語が飛び交う中、本当に貴重な異文化理解体験をさせてもらったなあ、と思っています。少々偉そうですが、「近くて遠い国、韓国が、近くて近い国」に感じられた喜びをこの8月、皆さんと共に味わいたいと思っています。

これまでのアクロスツアーと大きく違う点は、相互理解のための教材を作っていくということです。実際に韓国の先生方と生活を共にし、お互い顔を合わせて、情報交換しながら、生きた異文化理解体験をしてみませんか。

皆さん、友人、知人、同僚とお誘い合わせの上、ぜひ、ご参加ください！

申し込みの締め切りを、6月20日(金)とします。

以下まで、メールもしくは、郵送で、お願いいたします。

---

実行委員会の今後の方針としては、次のようなことを考えています。

各支部での再度呼びかけ

社会や国語の先生など、他教科の先生へのアプローチ

修学旅行で韓国に行っている学校へのアプローチ

メーリングリストなどでの呼びかけ

e-dream-s のホームページ上での呼びかけ

具体的な方策について、皆様には再度メールでお知らせしたいと思います。

なお、SARS についてご心配されている方もおられると思います。しかし、韓国は、日本と同様に一人の発症者も確認されていませんし、世界保健機構(WHO)のSARS 流行地帯にも指定されていません。韓国観光公社も安全をPRしています。

よって、現在 ECAP 2003 Korea 実行委員会は、実施の方向で準備を進めています。

---

## 第 12 回理事会の報告

---

日時：5月24日(土)17:00-19:00、5月25日(日)9:00-11:30

場所：神戸ベイシェラトンホテル&タワーズ 3階「北野」&「六甲」

以下、4つの議案が可決されました。

### (1)第1号議案

2002年度(2002年6月1日から2003年5月31日まで)事業報告承認の件

#### <各事業の報告>

カメルーンツアー、チャータースクールツアー2003、@aglance 緊急対策チーム中間報告(オンデマンド日本写真、使用例)、プレスリリース・助成金、ACROSS マレーシア・シンガポールツアー2002、e-dream-s ホームページ、e-dream-s 通信、NEWS A の CD-ROM 化プロジェクト、「ECAP 2003 Korea」中間報告、収益企画(小口債券・ワインプロジェクト)

### (2)第2号議案 2002年度収支決算承認の件

### (3)第3号議案

2003年度(2003年6月1日から2004年5月31日まで)事業方針承認の件

#### (ア) @aglance 事業 今後の方針

#### <決議事項>

「@aglance 事業」の継続・中止については、来年の2004年5月の理事会で判断をし、2004年8月の会員総会で決定する。

- (1) e-dream-s の会費収入だけでは、@aglance 事業の継続は難しい状況である。
- (2) その打開策の1つとして、昨年の収益企画に関する会議を開催し、小口債券の発行、ワインプロジェクトを決定し、既に展開している。
- (3) 再度、@aglance の達成目標や継続・中止の判断基準を明確にした上で、この1年間「@aglance の対策チーム」を中心に、全力で取り組む。

- (4) 2003年6月からの新事業年度では、@aglance 運営に関わる費用を削減する。  
( 目途として、年間 30%削減、約 70 万円での運営 )
- (5) (3)(4)の「目標・基準・方法」については、@aglance 事業の担当者である辻代表理事の責任で原案を作成する。

(イ)「ECAP」今後の方針

(4)第4号議案 「理事の選出に関する内規」についての件

理事の選出に関する内規案を作成するための委員会を設置する。次回の理事会に内規案を提案し、決定する。今度の定時会員総会(8月下旬)で新役員を選出するが、その際に適用したい。作成委員会の構成メンバーは、公募とし、応募した会員で構成する。

#### 編集後記

ECAPの第2回学習会で講師としてお迎えした朴先生は、来日された理由について、「実際に自分の目で、今の日本を見たかったから」とも言われていた。韓国というと、今の子どもたちは、「焼き肉」「キムチ」「ワールドカップ」と言う。本やテレビで見てイメージする「頭の中の韓国」は、実際に「目でみる韓国」とどのように違うのだろうか。朴先生は、「韓国の生徒たちには、戦争や侵略についてただ怒るのではなくて、自分で何かを感じて考えてほしい」と言っていた。では、われわれは、今の子どもたちに何を望むのだろうか。その答えを探しに、韓国へ行こうと思う。(田辺恵美)